2016年9月15日

立命館守山高校 アンケート調査リポート

放送倫理・番組向上機構［BPO］青少年委員会

1. 調査の目的

放送倫理・番組向上機構［BPO］青少年委員会では、毎月、子どもたちが接することの多い番組に関するざまざまな視聴者意見を収集している。しかし、それらのほとんどは大人の目線からの意見であり、特定の番組に関する青少年自身の意見に触れることは少ない。昨年10月末におこなわれた立命館守山高校での高校生との意見交換会（＜参考＞参照）では、あるバラエティー番組の一部を上映し、それをもとに放送局の制作者を交えて話し合いをおこなった。意見交換会の終了後に、参加した高校生たちを対象に、当該バラエティー番組に対する意見を尋ねるとともに、普段のテレビやラジオ、新聞、インターネット利用等のメディア接触状況、メディア・リテラシー等に関するアンケート調査を実施し、267名の有効回答を基に当該番組に対する意見の背景にどのような要因が関連しているのか、探索的な分析をおこなった。

2. 調査の方法と対象

立命館守山高校の1・2年生を対象に、2015年10月30日（金）のイベントの最後に「メディアと高校生の考え方に関するアンケート調査」冊子による調査を実施した。調査実施前に、参加者全員でテレビ番組「**芸能人格付けチェック 大予選会**」（朝日放送制作　2015年1月1日放送）の一部（お笑いタレントの罰ゲームのシーンなど）を視聴し、制作者の講演や討論を体験している。イベントに続いて会場内で無記名のアンケート票を配布し、その場で記入してもらい回収した。回収された調査票は271部であり、そのうち無記入のもの（1部）および生徒以外が記入していると思われるもの（教員等、3部）を除外し、合計267部（有効回答率：98.5％）を分析の対象とした。有効回答者の内訳は、男子126名（47.2％）、女子141名（52.8％）、学年は高校1年生138名（51.7％）、2年生は129名（48.3％）であった。分析に用いた調査項目は以下の通りである：

1) 会場で視聴した「芸能人格付けチェック 大予選会」のコンテンツに関して、面白さや危険さの評価、台本があると思うかどうか、不快の程度について、表7のような11項目を設定し、“1：ぜんぜんそう思わない”～“5：とてもそう思う”の5件法で回答を求めた。
2) 情報通信メディアの所有状況、利用時間、信頼性評価…テレビやパソコン等のメディアの所有状況（自分専用か、家族共有か）について尋ねた。また利用時間については、“平成26年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査”（総務省情報通信政策研究所, 2015）より、テレビ（リアルタイム）、テレビ（録画）、インターネット、新聞、ラジオ、SNS（LINE等）の各項目について、一日あたりの平均的な利用時間を平日と休日にわけて7件法（“0：見ない・しない”～“6：5時間以上”）で尋ねた。信頼性評価についても同総務省調査の項目を用いた（3－4. 参照）。
3) インターネットの危険性に関する学習経験…青少年にとって不適切なサイト（出会い系やアダルトサイト等）やネットいじめの問題などに関するインターネットの危険性について、どこで、あるいは誰に説明を受けたり学んだりしたかを表4のような11項目で尋ねた（各項目について1 = ある、0 = ない　の2件法）。
4) テレビに関わる仕事への就労意思…テレビに関わる仕事への就労希望の有無、希望職種について尋ねた。
5) 家族でのテレビの番組内容の共有傾向…親や家族と一緒にテレビを見ているか尋ねた（表2）。また、テレビ番組の内容について親・家族と一緒に見て内容について話し合ったりしているかどうかに関する5項目（Flanagan, et al., 2007 “Civic Measurement Models: Tapping Adolescents’ Civic Engagement”より、5項目の信頼性係数はα = .846）について回答を求め、5項目の加算値を解析に用いた。
6) メディア・リテラシー…知識や情報を獲得するために積極的にテレビや本、新聞、インターネットを活用するかどうかを尋ねる“メディアに対する主体的な態度尺度”（後藤・生田, 2005より、“1：そう思わない”～“5：そう思う”の5件法、6項目の信頼性係数はα = .62）を用いてメディア・リテラシーの測定をおこない、6項目の加算値を解析に用いた。
7) 熟慮思考傾向…物事を多面的に深く考える傾向に関する12項目（神山・藤原, 1991“ 認知欲求尺度”より、12項目の信頼性係数はα = .809）について、“1：全くそうでない”～“7：非常にそうである”の7件法で尋ね、12項目の加算値を解析に用いた。

3. 結果と考察

3−1. 情報通信メディアの利用時間

テレビ(リアルタイム、録画)、インターネット、新聞、ラジオ、SNS(LINE等)の利用時間について、平日と休日の利用時間を尋ねたが、休日のテレビ視聴時間と休日のSNSがほぼ同程度にもっとも長かった(休日のテレビは平均2.82、休日のSNSは平均2.80で、ともに2時間弱)。一方、新聞とラジオはともに休日も平日も“見ない・しない〜30分以内”に留まっている(平均0.36 〜 0.45)。男女差について分析したところ、図1のように、SNSの平均利用時間は平日・休日ともに女子の方が有意に長く、2時間以上であることが示された。メディア間の相関係数を算出したところ、テレビ(平日・休日・リアルタイム・録画)の利用時間は平日・休日のインターネットとSNSの利用時間とは有意な正の相関がみられたが($r = .18 \sim .82$, いずれも$p < .01$)、新聞・ラジオの利用時間とは無相関だった。

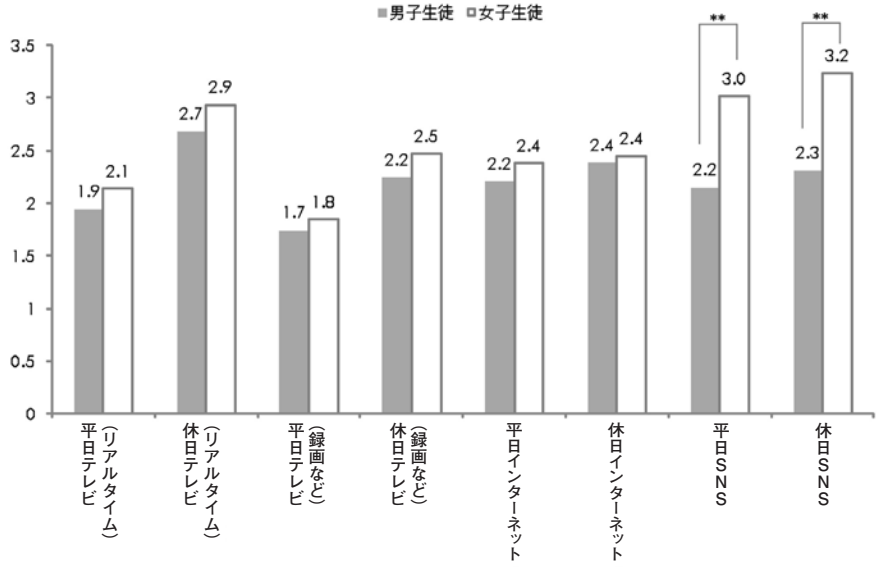

図1　メディア利用時間の男女比較

注）0：見ない・しない、1：30分くらい、2：1時間くらい、3：2時間くらい、4：3時間くらい、5：4時間くらい、6：5時間以上　新聞、ラジオについては利用頻度が極めて低く男女差の検討からは除外した。
**：$p < .01$で男女に有意な差が見られた

3−2. 情報通信メディアの所有状況

表1のように、ほぼ全員が自分専用の携帯電話・スマートフォンを所有している(96.6%)。タブレット端末(89.1%)、携帯音楽プレイヤー (80.1%)の自分専用器の所持率も高い。一方、自分専用のテレビ(15.4%)やインターネット接続できるパソコン(16.5%)の所有率は1割台と少なく、他の地域のサンプルで検証する必要はあるものの、家族とテレビやパソコンを共有している高校生が多数であることが示唆される結果となった。

表1　各種メディアの所有状況

	自分専用		家族と共用	
	n	%	*n*	%
パソコン（インターネット接続していない)	13	(4.9)	89	(33.3)
インターネット接続できるパソコン	44	(16.5)	210	(78.7)
テレビ	41	(15.4)	246	(92.1)
携帯電話・スマートフォン	258	(96.6)	13	(4.9)
携帯音楽プレーヤー	214	(80.1)	20	(7.5)
ゲーム機	160	(59.9)	63	(23.6)
タブレット端末	238	(89.1)	39	(14.6)
ラジオ受信機	38	(14.2)	85	(31.8)

3−3. 家族とのテレビの共有視聴

およそ8割(半分ぐらい、たいてい、ほとんどの合計)の生徒が、高校生段階でも家族といっしょにテレビを見ることがあると回答しており、テレビは“ほとんど家族と一緒に視聴している”という生徒も2割を超えている。背景として家族関係の良好さが影響していることが考えられるが、そのほかにも、大画面テレビの導入によって家族で1台のテレビを共有する家庭が多くなった可能性も予想されよう。今後、家族とのテレビの共有について、自宅で保有しているテレビの物理的サイズや家族でともに視聴している番組のコンテンツ、番組録画等との関連について検討してみると興味深いかもしれない。男女差を検討したが、性別による有意な違いは認められなかった。

表2　家族とのテレビの共有視聴状況(あてはまるもの1つを選択)

	n	%
ほとんど家族といっしょに見る	60	22.5
たいてい家族といっしょに見る	76	28.5
半分くらいは家族といっしょに見る	74	27.7
あまり家族といっしょに見ない	31	11.6
ほとんど家族といっしょに見ない	16	6.0
テレビは見ない	10	3.7
合計	267	100.0

3−4. 情報メディアへの信頼性評価

以下の各メディアの情報の信頼性について、それぞれ信頼できる情報はどの程度あるかを、“1： 全く信頼できない、2：一部しか信用できない、3：半々くらい、4：大部分信用できる、5：全部信頼できる”の5段階で尋ねた。信頼度は、高い方から「新聞」、「テレビ」、「ラジオ」、「雑誌」、「インターネット」の順であり、テレビと新聞は“4：大部分信頼できる”に近い高い平均値(テレビ：3.7、新聞：3.9)が示されたが、インターネットと雑誌については、信頼できる情報は一部〜半分程度であるとする値であった。

表3　各種のメディア情報に対する信頼性評価(平均値)

	M	*SD*
テレビ	3.7	.81
新聞	3.9	.84
インターネット	2.5	.74
ラジオ	3.4	.83
雑誌	2.8	.80

注)評定は“1.全く信頼できない〜 5.全部信頼できる”の5段階

3−5. インターネットの危険性に関する学習経験

出会い系サイトやアダルトサイト等青少年にとって有害なサイトやネットいじめの問題などに関するインターネットの危険性について、どこで、あるいは誰に説明を受けたり学んだりしたかを尋ねたところ、男女とも学校で学習したとする生徒が8割前後でもっとも高い割合となった(表4)。

表4　インターネットの危険性(不適切なサイトやネットいじめ問題等)について学習した場所･人(複数回答)

	全体 (*N*=267)	男子 (*n*=126)		女子 (*n*=141)	
	n (%)	*n* (%)		*n* (%)	
学校で教えてもらった	216 (80.9)	98 (77.8)		118 (83.7)	
親（保護者）から教えてもらった	73 (27.3)	26 (20.6)	<	47 (33.3)	*
きょうだいから教えてもらった	7 (2.6)	2 (1.6)		5 (3.5)	
機器の購入時に販売員に説明してもらった	12 (4.5)	5 (4.0)		7 (5.0)	
機器の購入時に資料をもらった	11 (4.1)	4 (3.2)		7 (5.0)	
友だちから教えてもらった	37 (13.9)	26 (20.6)	>	11 (7.8)	**
テレビや本・パンフレットなどで知った	57 (21.3)	24 (19.0)		33 (23.4)	
インターネットで知った	67 (25.1)	35 (27.8)		32 (22.7)	
特に教えてもらったり学んだりしたことはない	13 (4.9)	9 (7.1)		4 (2.8)	
わからない	15 (5.6)	6 (4.8)		9 (6.4)	
その他	2 (.7)	2 (1.6)		0 (.0)	

注）*: $p < .05$; ** $p < .01$で有意差あり

一方、親(保護者)から学んだ経験があるのは3割弱(27.3%)と少なめであり、インターネットやテレビ･本･パンフレット等と同程度であった。男女差がみられ、親(保護者)から学んだ経験は女子のほうが多く(男子：20.6%、女子：33.3%)、友だちから学んだ経験は男子のほうが有意に多かった(男子：20.6%、女子：7.8%)。高校生がネットに関するリテラシーやエチケットを獲得するための情報提供源として、親や友人といったプライベートな関係性の機能は未だ弱く、学校での学習が重要であることを示唆する結果といえよう。

3−6. 放送業界への就職希望について

将来、放送に関わる仕事をしてみたいと思うか、という質問に対し「放送に関わる仕事をしてみたい」と回答した場合には、具体的な職種についても選択してもらった。その結果、仕事してみたいという生徒は4割に達しており、職種では番組制作者志望が2割を超え相対的に高かった。

表5　放送業界への就職希望の有無と希望職種

放送に関わる仕事を…

	n	%
してみたい	111	41.6
してみたいとは思わない	149	55.8
無回答	7	2.6
合計	267	100.0

	n	%
アナウンサー／キャスター	30	11.2
番組制作者	62	23.2
報道記者	7	2.6
俳優（女優・男優）	23	8.6
お笑いタレント（芸人）	13	4.9
アイドル／タレント／歌手	19	7.1
声優	8	3.0
【その他】		
放送作家／脚本家	11	4.1
アニメーター	1	.4
ラジオのパーソナリティー	1	.4
広報	1	.4
編集	1	.4

注）　希望職種は複数回答

3−7. メディア･リテラシー：メディアに対する主体的態度

本調査では、情報収集やその理解についてテレビや新聞、インターネット、本といったさまざまなメディアを積極的に利用しているかどうかを尋ねる“メディアに対する主体的態度尺度”を用いてメディア･リテラシーを測定したが、その個人差に関わる要因について探索的な重回帰分析によって検討を試みた(表6)。その結果、本人自身の熟慮傾向が高いことの他にも、一緒に見たテレビ番組について親子で話し合ったりお互いの感想に興味を持ったりすることが多いこと、学校や家庭でのインターネットの危険性の学習経験が有意に関連することが示された。高校生のメディア･リテラシーの発達にとって、親や教師が教育的にかかわっていくことの有効性を示唆する結果であり、今後さらに子どもたちが家庭や学校で受けているメディア･リテラシー教育の具体的な中味を明らかにしつつ、検討を深める必要があると思われる。

表6　メディアに対する主体的態度の関連要因(重回帰分析)

	B	se	ß
性別	-.453	.457	-.063
学年	.377	.421	.053
テレビ･インターネット･SNSへの接触頻度	-.019	.029	-.040
新聞･ラジオへの接触頻度	.084	.078	.064
熟慮傾向	.156	.033	.282 **
親とのテレビ番組内容の共有傾向	.145	.044	.209 **
インターネットの危険性の学習経験	.471	.151	.183 **
R^2	.204 **		

**: $p < .01$

3−8. テレビ番組「芸能人格付けチェック 大予選会」(一部)に対する感想

参加者全員で視聴をおこなったバラエティー番組「芸能人格付けチェック　大予選会」に対する感想を求めたところ、番組に対して倫理的な問題を感じている生徒は少なく(“放送にふさわしくない”･“ややふさわしくない”を合わせて9%)、面白いと評価する生徒が大部分を占めた(“面白い”･“やや面白い”を合わせて85%、“面白いと思う人もいる”･“ややいる”合わせて88.3%)。“いじめにつながる”と考える生徒も非常に少なかった(5.3%)。

一方、“真似したら危険”と感じている生徒(小学生が真似：48.3%、中高生が真似：40.1%)、“危険なことをしている”と

いう認識(危ないことをしている：25.1%、危ないと思う人もいる：62.2%)は一定の割合を占めていた。不快感については、個人的に感じた生徒は非常に少なかったが(5.3%)、人によっては不快を感じることもあるだろうとする生徒は半数近くいた(46.1%)。当該の番組に対して、自分は面白いと思うし倫理的な問題や危険性･不快さは感じないが、世の中にはそう感じる人がいるだろうということや、低年齢の子どもにとっては危険性もあるかもしれないと客観的な立場から判断する生徒も相当数いることがわかった。当該の番組に、“台本があると思う”かどうかは、回答が分散しており、あるだろうと判断する(“とてもそう思う”と“少しそう思う”)生徒が52.5%と半数を超えたが、“ぜんぜんそう思わない”･“あまりそう思わない”と回答する生徒も合わせて26.2%いた。

表7　テレビ番組「芸能人格付けチェック 大予選会」(一部)に対する感想

	ぜんぜんそう思わない		あまりそう思わない		どちらでもない		少しそう思う		とてもそう思う	
	n	%	*n*	%	*n*	%	*n*	%	*n*	%
＜倫理的な判断＞										
テレビで放送するのにふさわしい内容ではないと思う	171	(64.0)	54	(20.2)	18	(6.7)	8	(3.0)	16	(6.0)
＜台本の存在＞										
台本があると思う	32	(12.0)	38	(14.2)	57	(21.3)	92	(34.5)	48	(18.0)
＜面白さの評価＞										
私はこの番組は面白いと思う	14	(5.2)	12	(4.5)	14	(5.2)	59	(22.1)	168	(62.9)
この番組を面白いと思う人もいると思う	10	(3.7)	4	(1.5)	15	(5.6)	57	(21.3)	179	(67.0)
＜危険・不快さの評価＞										
子どもが見たらいじめにつながると思う	134	(50.2)	86	(32.2)	33	(12.4)	9	(3.4)	5	(1.9)
小学生が真似すると危ないと思う	58	(21.7)	32	(12.0)	48	(18.0)	89	(33.3)	40	(15.0)
中学生・高校生が真似すると危ないと思う	67	(25.1)	41	(15.4)	51	(19.1)	72	(27.0)	35	(13.1)
私はこの番組は危ないことをしていると思う	76	(28.5)	55	(20.6)	69	(25.8)	60	(22.5)	7	(2.6)
私はこの番組を不快に思った	169	(63.3)	54	(20.2)	30	(11.2)	9	(3.4)	5	(1.9)
この番組を危ないことをしていると思う人もいると思う	29	(10.9)	17	(6.4)	53	(19.9)	111	(41.6)	55	(20.6)
この番組を不快に思う人もいると思う	36	(13.5)	37	(13.9)	71	(26.6)	90	(33.7)	33	(12.4)

本番組の評価にどのような要因が関連するか探索的に検討するために、危険さ･不快さの評価に関する7項目(表7参照)の合成得点(信頼性係数は$\alpha = .85$)を算出し、重回帰分析をおこなった(表8)。その結果、全体の説明率は小さいものの(R^2=.191, $p < .01$)、台本の存在の有無およびメディアに対する主体的態度の高さと、危険さ･不快さの評価の間に有意な関連がみられ、メディアに対して主体的に関わっているほど、また当該シーンはハプニングではなく台本があると考えているほど自分や他者の視点からみた危険さ･不快さの評価が高い傾向があることが示された。

表8　番組に対する危険さ･不快さ評価と関連する要因(重回帰分析)

	B	*se*	*β*
基本属性			
性別 (1=男子/2＝女子)	1.490	.796	.122
学年(1＝1年生/2=2年生)	-1.015	.732	-.083
メディア接触頻度			
テレビ･インターネット･SNSへの接触頻度	-.016	.051	-.019
新聞･ラジオへの接触頻度	.200	.136	.090
メディア･リテラシー関連要因			
熟慮思考傾向	-.095	.061	-.101
親とのテレビ番組内容の共有傾向	.039	.078	.033
インターネットの危険性の学習経験	-.209	.276	-.046
メディアに対する主体的な態度	.289	.112	.171 *
台本の存在の確信度	1.619	.298	.334 **
R^2	.191 **		

*: $p < .05$; **: $p < .01$

4. まとめと今後の課題

今回の調査では、日ごろ大人の視聴者から、子どもが真似しては危険だったり、いじめにつながってしまったりするこ

とが懸念されがちなバラエティー番組のいくつかのシーンについて高校生に視聴してもらい、制作者との意見交換を体験してもらったあと、その感想を無記名式のアンケート調査によって聞いてみた。上記の3−8. でみたように、大多数の生徒たちからみると、当該の番組は面白い番組であり、個人的には危険性も不快さもほとんど感じない、とする一方で、自分たちよりも幼い小中学生が真似したら危険だし、この番組を危険で不快に思う人もいるだろうとバランスよく客観的に判断している生徒が相当数いることがわかった。こうした客観的な判断がどの年齢段階からなされるようになるのか、今後、小中学生や大学生を含めて年齢幅を広げた調査によって検討してみる必要があるだろう。

高校生段階でのテレビ、インターネット、新聞・本といったさまざまなメディアに対する主体的な態度に関連する要因について探索的な分析をおこなったところ、学校や家庭等でのメディア・リテラシー教育の有効性が示唆される結果が得られた。調査対象となった生徒のうち4割以上が放送業界への就職に関心があるとしており、メディア情報に対して主体的に向き合うことのできる“よき視聴者・制作者”を育てていくには、家庭や学校、地域、そしてメディア側からどのようなかかわりが必要なのか、今後青少年委員会の調査研究として深めていきたいと考えている。

文　献

Flanagan, C. A., Syvertsen, A. K., & Stout, M. D. (2007). Civic Measurement Models: Tapping Adolescents' Civic Engagement. CIRCLE Working Paper 55. Center for Information and Research on Civic Learning and Engagement (CIRCLE).

後藤 康志・生田 孝至 (2004). メディア操作スキル尺度の作成に関する研究 日本教育工学会論文誌, 28 (Suppl.), 149-152.
(Gotoh, Y., & Ikuta, K. (2004). Construction of a Scale for the Skill of Media Utilization. Japanese Journal of Educational Technology, 28 (Suppl.), 149-152.)

神山 貴弥・藤原 武弘 (1991). 認知欲求尺度に関する基礎的研究　社会心理学研究, 6, 184-192.
(Kouyama, T., & Fujihara, T. (1991). A basic study of the Need for Cognition Scale. Japanese Journal of Social Psychology, 6, 184-192.)

総務省情報通信政策研究所 (2015). 平成26年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査　報告書　平成27年5月<http://www.soumu.go.jp/main_content/000357570.pdf> (平成28年8月14日)
(Institute for Information and Communications Policy)

＜参考＞意見交換会(立命館守山)について

実施日：2015年10月30日(金)の午前9時から正午
場　所：立命館守山高校(滋賀県守山市)メディアホール
出席者：立命館守山高校1・2年生およそ300人、朝日放送(テレビ制作、ラジオ、報道担当、アナウンサー)、BPO青少年委員会(汐見稔幸委員長、最相葉月副委員長、稲増龍夫委員)

概　要

テレビ制作、ラジオ、アナウンサー、報道の仕事について、それぞれ朝日放送の担当者から説明があり、その後、委員、高校生、放送局関係者の間で活発な意見交換を行った。

アンケート対象の視聴番組について

『芸能人格付けチェック　大予選会』(朝日放送制作、2015年1月1日(木) 16：30 ～ 17：40放送)の一部(お笑いタレントの罰ゲームシーンなど)を会場のスクリーンで視聴し、制作担当者が番組制作の仕組みなどについて説明した。

質疑応答では、BPOに「お笑いタレントへの罰ゲームなどが子どもたちのいじめを助長している」との視聴者意見が多く寄せられていることから、生徒たちに意見を聞いた。

生徒からは「バラエティー番組なので、多少の罰ゲームはあってもいいのではないか」「ちょっとしたことから発展していじめにつながることも考えられる」「番組の中で行われていることであり、テレビの中だけの話だと理解している。学校でのいじめには全く関係ない」などの意見があった。

謝辞：意見交換会およびその後の調査にご協力いただきました立命館守山高校の皆様、またご参加いただきました朝日放送の皆様に深く感謝申しあげます。